

児童文学

「不作の年」で済ませられるか

児童文学を読む大人同士の情報交換

創作 最 首 悟

一年たった。たの羅針盤という匿名書評欄に、いへんだった、と彼が書いた書評がまとめて入っている。初出一欄にそのことは「でしよう」と、このコラムの担当者柏谷さんがいう。ちよつとやしいけれど、それはそつだ。

子どもに直接言及することをしなさい、といふよりは、それは許されぬこととして、児童文学を読む大人どうしの情報交換のよつなことをしたかった。前に福首館の「子どもの館」という月刊誌があって、情報交換といふには語弊があるが、ややそのよつな機能を果たしていた。斎藤伊夫の『僕の冒険』（日本エディタースクール出版部、一九八七・三）に、「子どもの館」

の羅針盤という匿名書評欄に、児童文学を語るのは、躊躇されたりむずかしかったりする。一回目が終わったところ、清水真砂子さんから、少なくとも読者は一人いますから、と手紙をもらった。うれしかったなあ。助手は、殺人までできる、くらい自由なものだが、誰にもほめられないので、気が弱くもあるのである。読者の同じ紙面の上野暎の『砂の上のロビンソン』（新潮社、一九八七・五）をあの



上野 暎氏

でも単純に児童文学が好きだとはいいにくい。どつか幼稚で育ち上がついていないんじゃないの、逃避しているんじゃないか、という声が自分の中にもする。そつでないとしたら逆にハイカラ的嫌味になる。それで、生身でそつということができないとい

のである。児童文学には、今の大人の読者が増えなければ、深刻にそのことが求められている。そつという機運に向かつての二石と思つと、この一年大変ばかりではなかったことなる。

児童文学を読む大人の読者の感想にすぎなかったとして、も、しかし、それなりに、児童文学を求める気持ちは切実である。これを二年間述べた。切ない

るか、が問題である。子どものために子どもが読む本をプレゼントする業界を担う人々の悪戦苦闘をながしるにしないように努めたが、児童文学というジャンルがそこにあるし、子どもも観が関わるから、まったく無攻撃的というわけにはいかなかった。（さいしゅ・ささる氏 東京大学助手・生物学専攻）

大人は読者が増えなければ、いい作品、渾身をこめる作家も生れないだろう。少なくとも、漫画というジャンルでの、つげ義春の『無能の人』（日本文芸社、一九八七・九）に匹敵する作品には、出会わなかった。絶望と紙一重隔てて、見えないけれど確実に希望はそこにあるのだ、という作品がなかった。不作の年で済ませられ